

東北大学工学部

正会員

多谷 虎男

§1 棒状固体弾性体内の弾波の伝播に関する理論

凡ての振動現象は、従来解析が行われて来た様なスカラー振動ではなく、テンソル振動として解析されねばならない。固体弾性体内の弾性波は境界条件の如何を問わず、常に次の二つの Navier の方程式を満足しなければならない。即ち

$$\left. \begin{aligned} \rho \frac{\partial^2}{\partial t^2} \nabla^2 \phi &= 2G \frac{1-\nu}{1-2\nu} \nabla^2 \phi + \operatorname{div} \mathbf{X} \\ \rho \frac{\partial^2}{\partial t^2} \nabla^2 \Psi &= G \nabla^2 \Psi \end{aligned} \right\} \text{----- (1)}$$

茲に ϕ は変位場のスカラーポテンシャル、 Ψ はベクトルポテンシャルを表し、 $\mathbf{X}$ は単位体積当りの質量力を示すものとする。

上式(1)は、テンソル方程式であるから、坐標系の如何を問わず、凡ての場合に成立する。今、角柱棒について、その横断面内の二辺に平行する中心線を x, y 坐標軸に、縦方向中心線を z 軸に採れば、棒の一端に与えられた弾波による弾性波のスカラーポテンシャル ϕ 及び、ベクトルポテンシャル Ψ は次の様に仮定することが出来る。

$$\phi = U_0(x, y) \exp[i(\sigma z - pt)] \text{----- (2)}$$

$$\Psi = \begin{Bmatrix} U(y) \\ V(x) \\ 0 \end{Bmatrix} \exp[i(\sigma z - pt)] \text{----- (3)}$$

簡単のために質量力のない場合を考えることとし、(2)式を(1)式に代入して、その偏微分方程式を解き次式を得る。

$$U_0(x, y) = C_0 \cosh(\sigma x) + D_0 \cosh(\sigma y) + E_0 \cosh(x\sqrt{\sigma^2 - \sigma_2^2}) + H_0 \cosh(y\sqrt{\sigma^2 - \sigma_2^2}) \text{----- (4)}$$

但し、 C_0, D_0, E_0, H_0 は凡て常数とする。

又、(3)式を(1)式に代入して、その偏微分方程式を解き次式を得る。

$$\left. \begin{aligned} U(y) &= B_2 \sinh(\sigma y) + C_2 \sinh(y\sqrt{\sigma^2 - \sigma_2^2}) \\ V(x) &= B_1 \sinh(\sigma x) + C_1 \sinh(x\sqrt{\sigma^2 - \sigma_2^2}) \end{aligned} \right\} \text{----- (5)}$$

(4)式(5)式における $C_0 \cosh(\sigma x)$, $B_2 \sinh(\sigma y)$ 及び $B_1 \sinh(\sigma x)$ は(1)式と満足するが(1)式は必要条件式に過ぎない) 必要且つ充分な Navier の方程式

$$\left\{ \frac{\partial^2}{\partial t^2} (\operatorname{grad} \phi) - C_1^2 \nabla^2 (\operatorname{grad} \phi) \right\} + \left\{ \frac{\partial^2}{\partial t^2} (\operatorname{rot} \Psi) - C_2^2 \nabla^2 (\operatorname{rot} \Psi) \right\} = 0 \text{----- (6)}$$

と満足しないので棄てる。従って、この場合の解は結局、次の様になる。

$$\phi = \{ E_0 \cosh(x\sqrt{\sigma^2 - \sigma_2^2}) + H_0 \cosh(y\sqrt{\sigma^2 - \sigma_2^2}) \} \exp[i(\sigma z - pt)] \text{----- (7)}$$

$$\Psi = \begin{Bmatrix} C_2 \sinh(y\sqrt{\sigma^2 - \sigma_2^2}) \\ C_1 \sinh(x\sqrt{\sigma^2 - \sigma_2^2}) \\ 0 \end{Bmatrix} \exp[i(\sigma z - pt)] \text{----- (8)}$$

$$u = \left[\begin{array}{l} \sqrt{\sigma^2 - \sigma_1^2} \cdot E_0 \sinh(x\sqrt{\sigma^2 - \sigma_1^2}) \\ \sqrt{\sigma^2 - \sigma_1^2} \cdot H_0 \sinh(y\sqrt{\sigma^2 - \sigma_1^2}) \\ i\sigma \{ E_0 \cosh(x\sqrt{\sigma^2 - \sigma_1^2}) + H_0 \cosh(y\sqrt{\sigma^2 - \sigma_1^2}) \} \end{array} \right] + \left[\begin{array}{l} -i\sigma C_1 \sinh(x\sqrt{\sigma^2 - \sigma_2^2}) \\ i\sigma C_2 \sinh(y\sqrt{\sigma^2 - \sigma_2^2}) \\ \sqrt{\sigma^2 - \sigma_2^2} \{ C_1 \cosh(x\sqrt{\sigma^2 - \sigma_2^2}) - C_2 \cosh(y\sqrt{\sigma^2 - \sigma_2^2}) \} \end{array} \right] \cdot \exp[i(\sigma z - pt)] \quad \text{-----}(9)$$

上に得た(9)式について次の5つの場合に分けて、境界条件式 $[u_{xx}]_{x=a} = 0$, $[u_{yy}]_{y=b} = 0$, $[u_{2x}]_{x=a} = 0$, $[u_{yz}]_{y=b} = 0$, $[u_{xz}]_{x=a} = 0$ 及び $[u_{xy}]_{y=b} = 0$ の凡てを満足するか否かを吟味するに、(詳細は省略)

(1) $(\sigma = \frac{P}{C}) < (\sigma_1 = \frac{P}{C_1})$ なる場合 : $\left(\text{但し, } C_1^2 = \frac{2G}{\rho} \left(\frac{1-\nu}{1-2\nu} \right), \quad C_2^2 = \frac{G}{\rho} \right)$

(2) $\sigma = \frac{P}{C} = \frac{P}{C_1} = \sigma_1$ なる場合 :

(3) $(\sigma_2 = \frac{P}{C_2}) > (\sigma = \frac{P}{C}) > (\sigma_1 = \frac{P}{C_1})$ なる場合 :

(4) $\sigma = \frac{P}{C} = \frac{P}{C_2} = \sigma_2$ なる場合 :

(5) $(\sigma = \frac{P}{C}) > (\sigma_2 = \frac{P}{C_2}) > (\sigma_1 = \frac{P}{C_1})$ なる場合 :

上記5つの場合の内、(2)の場合のみは實際上存在し得るが、他は凡て實際上存在しないことがわかる。(2)の場合、縦方向衝撃波の位相速度は、 C_1 に従って角柱棒での縦方向衝撃波の位相速度は C_1 に限ることが分る。一般に縦衝撃波の位相速度は角柱棒に限らず、円柱棒其他、不整形断面の棒においても C_1 である。これは従来定説となっている Pochhammer の理論に反駁を加えるもので、棒の振動更には、棒状構体の振動の基礎として、極めて重要な意義を持つものと考えられる。著者は円柱棒についても解析を行っているが、ここでは省略する。

§4 実験結果 当日、多数の検証的実験結果について、スライドを用いて説明を行う。

§5 結論

棒の中に生ずる縦波の速度は、従来公式の様に $C_0 = \sqrt{E/\rho}$ ではなく $C_1 = \sqrt{\frac{2G}{\rho} \left(\frac{1-\nu}{1-2\nu} \right)}$ であって、棒の形状に関りなく、棒の材料が同一な限り、一定であることが、実験、解析の両面で明瞭にされた。

参考文献

1. A.E.H. Love : "A Treatise on the Mathematical Theory of Elasticity", Cambridge University Press, London, 1934.
2. H. Kolsky : "Stress Waves in Solids", Dover Publications Inc., New York, 1963.
3. Hermann Schlichting : "Boundary Layer Theory", McGraw Hill Co., New York, 1960.
4. Y.C. Fung : "Foundation of Solid Mechanics", Prentice-Hall Inc., Englewood Cliffs, 1965.
5. Wilhelm Flügge : "Tensor Analysis and Continuum Mechanics", Springer-Verlag, Berlin, Heidelberg, 1972.